

## 【京都市教育長賞】

「積みよ経験、広げよ視野

～御蔭祭参加から学ぶ～

京都府立洛北高等学校附属中学校3年

松本 諒子



「天地の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を」

これは、神楽「浦安の舞」の歌詞にもなっている、1933年の昭和天皇御製です。私は、今年の五月に行われた御蔭祭で、この「浦安の舞」を舞わせていただきました。御蔭祭は、京都三大祭のひとつである葵祭の前に、下鴨神社で行われるお祭です。毎年、近隣の小、中、高生が数人参加しています。

私は、中学2年生のときにこのお祭の行列に初めて参加しました。その時は行列に参加して歩くだけでしたが、今年は、新しく増えていた「神楽舞奉納」の枠で参加しました。今年からの試みで、神社から提案されたそうです。

舞の稽古の際に、一般の中高生が神楽を舞うということが珍しいからでしょうか、新聞社の取材を受けました。「抱負を教えてください」と言われ、私はこう答えました。「他の学校ではなかなかできないことなので、精一杯やりたいです。」

祭のあと、私は考えました。「他の学校でもこのように、『小、中、高生が地域の祭りに参加する』ということができるのではないか」と。御蔭祭の装束は、行列に参加する人も神楽舞の人も皆、神社のものを着付けていただきましたし、神楽舞の鈴なども、全て神社のものでした。しかし、これは下鴨神社に限らず、どの神社でも同じではないでしょうか。どの神社にも祭事があり、それに関わるものは神社に保管してあるはずで、つまり、他の神社でも、下鴨神社と同じことができるはずなのです。

方法はひとつだけではありません。御蔭祭のように行列に並んで歩く、神楽舞を披露する以外にも、それぞれの祭事の形態に合わせたやり方であれば良いのです。当日に参加させることが難しいという場合には準備を手伝ってもらうなど、方法はいくつもあります。すでにそうしているところもあるでしょう。私は、その取り組みができる限り広がってほしいと思うのです。

なぜ私がそう思うのか、それは、実際に参加することがとても良い経験になるからです。もちろん、信仰の関係でそうもいかない人もたくさんいるでしょう。しかし、私のように特に何も支障のない人には、ぜひ積極的に参加してもらいたいです。最近、小学校で「昔あそび」の時間があり、中学校では調理実習で和菓子を作るなど、「伝統の継承」の取り組みが行われています。私も、小学校の頃、その一環として何度か「調べ学習」をしました。しかし、今では思うのです。「調べ学習」は確かに有効ではありますが、一度は「実際に経験する」機会を作るべきではないかと。実際に装束を着て行列に並んで歩いたり、神楽舞を習って神事で披露したりするという経験は、御蔭祭について知るととても良い機会になったと思います。資料を読んで学ぶのも大切ですが、実践や経験は、何事にも代え難く重要であるということを実感しました。また、こうして、「自分も伝統文化を継承している」という思いは、積極的に伝統文化に触れようとする姿勢を導くと思います。

「百聞は一見に如かず」ということわざがあります。これは、「何度聞くよりも、自分の目で見るほうが確実だ」という意味ですが、私の考える「実際に経験することが重要」ということも、これに通じるように感じられます。そしてこの「実際に経験する」ということは、伝統文化や祭事に限らず、日常の様々なことに言えると思います。私は今回の神楽舞の経験から、「やってみればできるものだ」と少し自信がついたように思えます。

このように、学校が地域の神社と協力して祭などを運営することで、生徒たちはそれらを身近に感じるすることができます。また、そういった「非日常」的な時間は「いつもと違うことに挑戦してみよう」という気持ちを促し、それは、私のように自信をつけていくことにもつながるのです。

経験は糧になり、「非日常」的な時間は日常を見直す機会を与えてくれます。様々な経験で視野を広げ、自分を豊かにしていくこと。これは、学校で勉強をするのと同じくらい、大切なことではないでしょうか。